第22号　20円
開館五周年記念号
昭和45年12月25日

内容

創造の過程と成果…… 1
歓びの歴史をつくる…… 2
お祝いの言葉…… 4
大学セミナー・ハウス讃歌… 5
記念講演…… 6
思い出と展望―祝辞より…… 7
ご縁の深いことです…… 8
第31回大学共同セミナー…… 9
ピアノ購入資金のお願い……10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
《所在地》
東京都八王子市下柚木
電話 0426-76-8511～2
《東京事務所》
東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京(270)4431
振替口座 東京74590番
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

創造の過程と成果

東京大学名誉教授
大塚 久雄

学問における創造ということは、〝新しい着想が得られる、その得られた着想をすでに知られている、あるいは新たに収集したさまざまな事実に基づいて検討し、また、それを論理的に整序して合理的な構成を作り上げていく〟、こう言えるのではないかと思います。新しい着想が得られる過程と、それを論理的に展開していく過程とは、キレイに分けられるものではなくて、一緒くたに出てくるようにも思いますが、その中で、学問における創造が創造である所以は、どちらかというと、新しい着想が得られるというところにあるのではないでしょうか。

マックス・ウェーバーが「職業としての学問」の中で言っている有名な言葉に、アインファル（思いつき）というのがありますが、これはパッとひらめく、ひらめきとして現われる、ハッと気づくとか、そういうことだろうと思うのです。ひらめきが得られるためには前提条件がいる。その前にその人は問題をかかえているわけですが、それよりも先に、例えば今までの学問的業績に対して、かなりの程度に成熟していなければならない。しっかりと準備があり、しかも、その中で、ある一つの問題を持っている、これを何とかして解決しなければならないという気持を、いつも持っている。そういう前提があったときにパッと着想が来る。…来ないかもしれない。必ず来るのかどうかは、私にはわかりません。しかし、パッとひらめくとか、ハッと気づくといいますが、それは決して楽な道ではありません。

それぞれの学問分野にはすでに、ある学問的なシステム、理論的なシステムがあるわけです。ところが、研究している間に、妙な事実にぶつかる。この事実を、われわれが、すでに知っている学問のシステムで把えようとしても、うまくいかない。一方が正しければ他方は正しくないというふうに、はみ出してしまう部分が出てくる。しかし、それぞれの事実は、どうしても間違いないと考えるよりほかはない。こういう場合にぶつかるわけです。ここで、〝こうでもあるし、ああでもある、大変複雑であります〟ということでは、実は学問にはならない。それを統一的に、できるかぎり一般理論によって把えていこうとする努力が加わって、初めて学問になるわけです。統一的に把えることができず、その前に壁が立ちはだかって研究の進展を押しとどめてしまおうとする、どうすれば突破できるのだろう。そういう緊張をはらんだ一つの問題意識が生れてくるとき、研究上、壁を突き破るという問題が出てくるわけです。

どうやったら、壁を突き破ることができるか、疑うことから学問的創造は始まるといわれることもありますが、ただ疑うだけでは、学問上の創造は生れてこないと思います。疑うべきもの、疑うべからざるもの、あるいは、疑う価値のあるもの、疑う価値のないものをえり分けなければならない、それをやらないで、新しい学説とか研究ということで飛びついたり、定説あるいは支配的な学説と違うことをいうだけでは、新しい学問上の創造は生れてきません。

ところで、学問上の創造を行なう人は、なぜ、そんなことをやるんだろう。学問というものは、すべてを形式合理的な論理によって組み立てていこうとする性格をもっておりますが、その底には非合理的な動機が支えになっているという過程があります。キルケゴールの言葉を引けば「詩人は自分の内面に一つの苦悩をもっている。その苦しみに耐えかねて大声で泣き叫ぶ、そうすると、それを聞いた人が美しい歌だ、もっと歌えという、詩人たる者、たまったものではない。ところで批評家は詩人とほとんど同じようなことをやるが、そこには紙一重の差がある。何故か、批評家の内面には苦悩がない」。このことは学問における創造の場合にもあてはまると思います。創造する人間は、自分が苦しんで、その成果は他人が享受する。しかもその成果は、ある一定の知識水準さえあれば近づくことのできる、知ることのできる事実と理解することのできる論理的構成をもっているわけです。そうすると、実にでき上がったものは当り前のことになる。つまり、コロンブスの卵ということです。創造する人々は、もう一つそんな役割をやっているわけです。彼が苦しんで泣き叫んで、その苦しみに耐えて作り出した成果というものはそれが真理であればある程、当り前の、何でもないものなんです。

私は、すべてを考える場合に、学問における創造の場合でも、創造する人は、自分が苦しんで、その成果を他の人々の享受に委ねているんだ、ということを忘れないでいてほしいと思います。

（「開館五周年記念セミナー」全体講義の概要　文責・編集者）

史をつくる
周年記念

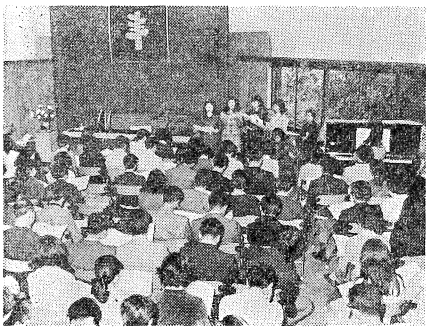
記念式典
昭和四五年一〇月二二日

ここ多摩の丘には秋晴れの柔い日射しが注ぎ、祝福された雰囲気のうちに式典が行なわれた。参会者の中には一九六二年一月二〇日この丘を敷地に選定するため視察に来られた大浜信泉、佐原六郎両先生をはじめとして、五年前の開館式に泥んこ道を歩いて本館式場に入られた多くの先生方の顔も見え「あの時は雨降りでね…建物も未完成だったし…道路も未完成だったし…」といった回顧談が、整備された現状に比べて、しきりに交わされていた。

式典は開館以来、ご縁の深い東京女子大白井常教授を司会者として進行する。司会者は、先ず挨拶の中で大人の夢が実現したセミナー・ハウスは、若い学生に対し、青年は夢を持たねばならぬと語りかけている貴重な場所であると述べられた。高村理事長は式辞の中で昭和四〇年七月五日に開館式を挙げたのであるから、五周年記念式典はもっと早く行なうべきであったが準備の都合で、今日まで延びたこと、財団法人設立発起人会が開催されたのは昭和三六年一一月三〇日であるから、実質的には創立一〇周年に相当すること、開設後の会員校の増加、利用者の増加、講堂、図書館、松下館、長期セミナー館等建物の増築に伴う年毎の拡充と発展について述べ、最後に五周年記念会募金運動の達成に協力を求められた。

増田館長は記念論集の発行にご協力下さった執筆者の諸先生、今日まで共同セミナーの企画運営に絶えざる奉仕をして下さった山内恭彦、鈴木皇、川原栄峰、芳賀徹の四先生の功労に謝辞を述べ、次の勤続五年の職員を表彰し、記念品を贈呈された。

業務課長土田美芳、業務課飯田栄、寄宿主任荒川孝子、ボイラー主任設楽秀吉。


式典風景――讃歌の発表

最後に増田館長は、今後の抱負の一端を述べ、新しい方向を示された。

祝辞は創立の参画者大浜信泉先生、第1回共同セミナーの運営委員長をつとめられ、今は朝日新聞の論説委員である永井道雄氏、幾度か共同セミナーを主宰された堀米教授のご三人によって別記のごとくそれぞれ特長のある祝意を述べられた。

五周年の最大の記念は、校歌とも寮歌ともいうべき大学セミナー・ハウス讃歌がこの式典を期して贈呈されたことである。何といっても詩人藤富保男先生が今夏共同セミナーの講義にこの丘を登られたことがこの讃歌を誕生させた最大の奇縁なのである。しあわせな出会いであった。そして藤富先生のご推薦により作曲家塚谷晃弘先生のご協力が得られた。若人の感情を歌いあげた美しい詩が、若人がこの丘を散策しながらフォーク風に口ずさむことのできる快いメロディーの曲をもって、セミナー・ハウスはほめたたえられながら、ここ多摩の丘に根を下すのである。大学セミナー・ハウス讃歌は、あなたとわたしと、ぼくときみとが、この大学セミナー・ハウスの目的と使命を守ろうとする誓いなのである。藤富先生が詩を朗読され、これを増田館長に贈られ、ついで塚谷先生からも曲譜が贈られる。女子学生から両先生に花束の贈呈があり、会場からは感謝の拍子がわき起こる。讃歌誕生のうるわしき瞬間である。

讃歌をどなたに歌っていただいて発表するかを考えたが、会員校でもあり、かつて音楽セミナーをして下さったこともある東京女子大学の池宮英才教授にお願いすることにした。同教授の快諾を得て、東京女子大学生グループの協力を仰いだ。わずかに曲ができてから一週間程の練習時間しかなかったが、さすがは池宮先生指導の女声のコーラス、ことに新調のピアノの伴奏により一段と効果をあげ美しい歌声が講堂の外にあふれでた。すばらしい発表会となった。

終わりに閉会の挨拶に立った飯田専務理事は感慨も一入深く、思い出と展望を語り、セミナー・ハウスはいつも時代の風潮に油を注いで歯車の回転を早めるのでなく砂をかけて歯車の回転を遅くするような役目を果たしたいと所感の一端を述べ、来会者一同に謝意を表わされる。いつの間にか、いとも小さな花束が女子学生の手によって専務理事に贈られる、心ゆかしき感謝のしるしであった。

最後に塚谷先生の指導と東京女子大グループによる合唱により、参会者が讃歌の練習を行なった。

お祝いパーティー

かくして薄暮の丘を参会者はそぞろ歩きながら、ブリッジの端に

プログラム

記念講演　一四時　講堂
司会　慶大助教授　木原弘二
「現代の学問的状況」
―医学を例にして―
前千葉大学長　川喜田愛郎

記念式典　一五時　講堂
司会　東京女子大教授　白井　常
挨拶　理事長　高村象平
感謝と表彰　館長　増田四郎
祝辞によせて
元早大総長　大浜信泉
東京大学教授　堀米庸三
朝日新聞社論説委員　永井道雄
大学セミナー・ハウス讃歌
作詩者の朗読　藤富保男
作曲者の言葉　塚谷晃弘
合唱　東京女子大学生有志
（池宮英才教授指導）
閉会挨拶　専務理事　飯田宗一郎

お祝いパーティー　一六時　食堂
乾杯　明治大学総長　春日井薫
お祝いの言葉　森戸辰男
加藤一郎
村井資長

屋外サンセット交歓会　一七時
歩行者天国
ボン・ファイヤー

歓びの歴五　開館

つくられた五周年記念のアーチをくぐり本館食堂のパーティー会場に入られる。学生約二〇〇名、教授、社会人約一〇〇名がおそばやおしるこ、おでんの店がのれんをかけて並んでいる会場をすっかり埋め、盛大なパーティーとなる。

乾杯に先立って、記念論集の執筆者と共同セミナーの功労者に女子学生からレイをかけて記念品を贈呈する。その席におられた増田四郎、堀米庸三、この両先生が論集の方で、鈴木皇先生が共同セミナーの方でこの感謝を受けられた。本法人の常務理事で明大総長春日井薫先生が開宴の挨拶とともに乾杯の音頭をとられ、一同杯をかかげて万歳三唱。

食べる。話す。笑う。議論する。歩き回る。しばらくという挨拶の交換。ほほえましい光景あれこれ。宴の半ばで、早稲田大学の新総長村井資長先生、多忙の中を馳せ参じて下さった東大総長加藤一郎先生、この丘にはおなじみの母堂同伴の久保田きぬ先生のスピーチをいただく。セミナー・ハウスには珍しい花火が外の丘で打ち上げられる。お祝い気分濃厚である。

おそばののれんの前では、加藤東大総長を囲んだ十数名の学生が、そばを食べながら何かを談笑しながら話している。ある人が「〃加藤セミナー〃が始まっているね」といっていた。

サンセット交歓会

その一　歩行者天国

食堂のパーティー会場から、ほどよく切り上げて屋外に出ると、もうすっかり夕暮れである。本館からサービス・センターに通じる通路には提灯が並んでかけられ、途中の小広場にはタコ焼、たい焼、わた菓子の屋台が並び、名前もよろしくこれを歩行者天国とよんだ。大変な雑踏である。どの店も長い列をつくっている。子ども時代にかえったり、田舎のお祭りを思い出したり、この趣向は意外に好評であった。

その二　ボンファイヤー

本館の裏側の広場には、枯木、古材、古紙が積まれ、学生たちが輪をつくって火を焚いている。キャンプの歌が合唱される。五年間の不用品と不用な心が焼かれる。いわば不用になるまでこのハウスの役にたってくれた数々、諸々の苦労を慰める供養の火でもある。火は消えた。七時頃にすべてのプログラムは全く終了。記憶すべき一日であった。

記念講演

式典の前、一時間を講演に当て、細菌、ヴィルスの研究で名声の高い生物学者川喜田愛郎先生に記念講演をお願いした。最近は評判の「病気とは何か」という本を書かれたし、国際的にも国連の化学細菌兵器白書の作成委員であられたり、ジュネーブの軍縮会議日本代表のお一人であられるなど、現代科学を語るとき、そのお名前が思い浮ぶ学者であられる。

司会は同じく分子生物学を専攻される慶応大学医学部助教授木原弘二先生にお願いし、川喜田先生の人となりと業績の一部が紹介される。いかにもセミナー・ハウスの活動を意味づけるような興味深い講演であった。（概要は六頁）

＊　＊　＊

大学セミナー・ハウス年譜

昭34・11・25＝セミナー・ハウスの構想を聞く会　於四谷福田家
昭36・8・18＝後援会設立世話人会　於銀行クラブ
昭36・11・1＝設立準備事務所開所（三井銀行本町支店ビル3階）
昭36・11・30＝財団法人設立発起人会（発起人校14校）　於工業クラブ
昭37・1・31＝セミナー・ハウス建設地決定
昭37・3・31＝財団法人設立許可，石館守三氏理事長に就任
昭37・8・1＝寄付金免税許可
昭37・9・1＝「大学と人間」（セミナー・ハウス設立の学問的根拠）発行
昭37・9・17＝大学セミナー・ハウス建設後援会創立総会　於東大懐徳館
昭38・5・15＝「大学と人間」叢書第1巻「人生の選択」発行（みすず書房）
昭39・10・3＝大浜信泉氏理事長に就任
昭39・12・11＝寄付行為一部変更認可　館長に茅誠司氏，専務理事に飯田宗一郎氏就任
昭40・1・25＝セミナー・ハウス・ニュース創刊（以後年4回発行）
昭40・7・5＝セミナー・ハウス開館式挙行，第1回大学共同セミナー開講（会員校30校となる）
昭40・11・1＝新築落成式挙行
昭41・6・1＝大学セミナー・シリーズ第1集「ウェーバー社会学における思想と経済」（大塚久雄著）発行
昭41・10・4＝増田四郎氏理事長に就任
昭42・5・29＝寄付金免税許可（第2回募金のため）
昭42・7・10＝講堂兼体育館及び図書館落成式挙行（開館2周年記念），千人会の発足
昭43・4・9＝法人事務所を八王子の本館に移転，寄付行為一部変更認可
昭43・6・29＝テニス・コート開き挙行
昭43・12・7＝松下館落成式挙行（開館3周年記念）
昭44・7・22＝寄付行為一部変更認可（評議員定数の増員）
昭45・4・1＝理事長に高村象平氏，館長に増田四郎氏就任
昭45・4・28＝寄付金免税許可（募金第3回目のため）
昭45・5・10＝長期セミナー館落成式挙行（開館5周年記念），会員校36校となる
昭45・10・22＝開館5周年記念式典挙行，記念論集「西洋と日本」（中公新書）発行

年度別建物増加調

年度	建築面積 (m²)	建築面積 (坪)	床面積 (m²)	床面積 (坪)	備考
40	2,694.58	816.5	3,680.92	1,115.5	本館，セミナー室，宿舎群等
42	558.57	169.3	528.42	160.0	講堂，図書館
43	277.74	84.2	276.22	120.0	松下館（教師館）
44	355.58	107.8	577.76	175.1	長期セミナー館
計	3,886.47	1,177.8	5,063.32	1,570.6	——

年度別敷地拡張調

年度	取得年月日	坪数
37	37・7・3	14,985
37	37・11・29	2,020
44	44・9・5	4,763.9
45	45・9・16	392
	計	22,160.9

年度別利用状況調（昭和40年7月から同45年8月まで）

年度	宿泊者実人員	月平均	利用者延人員	月平均
40	4,697人	522人	13,954人	1,551人
41	12,119	1,010	38,203	3,184
42	15,513	1,293	50,478	4,207
43	17,756	1,480	51,122	4,260
44	17,756	1,479	55,856	4,655
45	9,133	1,827	25,336	5,067

昭和44年度における開館日数350日，休館日数15日

お祝いの言葉

佐藤喜一郎

五周年が間近いという話を飯田宗一郎君から聞かされていたが、生憎その前後欧州へ短期間だが行く用事のために、記念式は残念ながら欠席した。しかしお祝いの言葉をニュースに載せてもらうことができて有難い。

元来、この施設が、始めから二十有余の官・私立大学の共同使用に供するという点に私は大いに共鳴した次第なのであるが、このセミナー・ハウスの企画を、大学の先生方と私のような財界側の幾人かが集まって、東大の懐徳館で相談した時から数えると、実は一〇年近くなっている。関係者はこの間皆奉仕の精神と善意の塊のような人達の集まりで、それだけに多少強引であったとも思う。しかし目的達成には強引も時に必要である。実は、私は学生時代にゼミナールの経験を持っていない（もっともその代わりに先生の私宅に押しかけたことは時々あったが）。学校の教室でもゼミをやれないわけではあるまいと思うが、居を移せば気分も変り、それが緑に囲まれた静かな環境だったらなお良いはずである。

このセミナー・ハウスが開業してから間もなく学園紛争が始まった。知らぬ人は、これが何か紛争対策ででもあるかのように思ったかもしれないがそれは勘違いである。少なくとも、私の意識は勉強したい学生たちと、これに応じて指導したい意欲のある先生方に場所を提供してあげようと考えたのにつきる。

一時的にしても学校が警察の這入れない治外法権地域のような錯覚を持たせたのが紛争の始りで、それは確かにだれかの誤りであったと思う。しかしセミナー・ハウスは全く別の次元に立っていて紛争とは直接の関係はないので、学内に貼られる穢いビラなどこのところには一つもないと感心されたりするが、これは全く当り前のことだと思う。政治でも経済でも一面競争、一面協調ということが国内でも国際間でも必要なのだが、この理想は口でいう程実行は容易でない。研究、教育の面でもこれは恐らく同じではあるまいか。各大学が持ち味を活かしながら競争もするし、他面協調もできるといった姿をこの大学セミナー・ハウスの活動を通じて実現されるとすればすばらしいことだと思う。

五周年を迎え後援してくれた財界側に対し、またこのセミナー・ハウスを十分に利用して下さる大学側に対しても「ああ、よかった」という気持で一杯である。

森戸　辰男

五周年の祝宴における乾杯の役目をお引受けしたところが、その後中央教育審議会の会合とかち合いまして、残念ながらお約束を果たしえないことになりました。はるかに心の中で乾杯して、皆さまとともにこの佳い日をお祝いいたします。

大学セミナー・ハウスの胎動当時、飯田さんからご相談を受けました際、私は大賛成で、ひたすらよい計画の実現を祈っておりました。その理由の一つは、私が東大の経済学科で勉強していた頃―六〇年ほど前のことですが―高野岩三郎先生とドイツからの招聘教授ヴェンチッヒ博士との提唱で、ゼミナールが正式に発足しました。社会科学の分野ではこれが草分けでありまして、私はその最初の参加者でした。その後このゼミナールはわが国の諸大学に普及しましたが、これが画期的な姿でデビューしたのは、このセミナー・ハウスだと思います。そんな因縁もあって私はセミナー・ハウスの発展を心から念願してまいりました。

もう一つ、ここ両三年、日本の大学ではかつてない大騒動が起り、多くの大学ではその使命である研究も教育もろくろくできなくなりました。日本の大学のこの転落期に、セミナー・ハウスは画期的な発展を遂げました。まことに不思議な対照であります。

さらに今日の大学では教師と学生との間に深い溝ができ、学部の間には高い壁ができて、大学の使命達成の大きな妨げとなっていることはご存知のとおりです。ここでもセミナー・ハウスは、その実践を通じて、この二つの病弊を治療するための大学改革の方途を指示しておるようであります。

このような感想をもち、かつその明るい前途に希望をかけて、この五周年をお祝いするとともに、精神・物質両面における皆さま方の一段のご奮発を期するものであります。

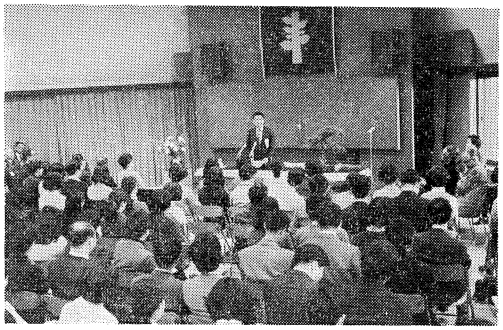
……新聞もこぞって……

『朝日』社説（九月二〇日）が、先ず〝セミナー方式で教養課程の改革を〟と提案し、一般教育のセンターともいうべき先駆的モデルとしてすでに大学セミナー・ハウスが現存していると書き、同じように当ハウスの教育効果が注目を集めているという『毎日』余録（一〇月二二日）ともども、このような試みが大学改革の突破口とも、有力なヒントともなるであろうと、五年間の成果と実績を論評してくれた。

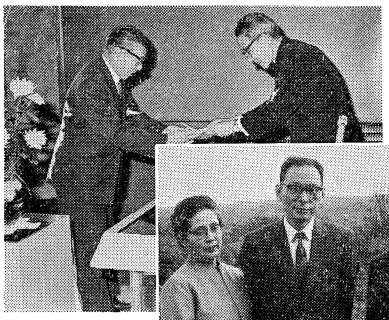
一方、茅誠司前館長が、「五周年の感慨」（読売・一〇月二一日）を綴られ、当初創設の可能性を危惧したこと、しかし、飯田専務理事がミスター・ブルドーザーの愛称そのままに強力に計画を推進し、その熱意が佐藤喜一郎氏を動かして問題解決のトビラが開かれるに至った経緯を感慨をこめて回顧されながら、今後、このような計画に国が財政的援助を惜しまないようにと要請されている。くだんの飯田専務理事も「人・その意見」（朝日・一〇月三一日）に登場、続いて同社の求めに応じて「誕生して五年」（朝日・一一月五日）という感想を書いているが、これは社会に対する公式な報告として、お読みいただきたい。

式典当日の情景は、この日のハイライト―大学セミナー・ハウス讃歌の発表を中心に、「待望の寮歌誕生」（読売・一〇月二三日）「多摩の丘に讃歌響き」（全国学園新聞・一一月一日）と、〝美しいメロディーで、詩はセミナー・ハウスの意図をうまく表現している〟といった会場の声も拾っていた。「思索の場与えて五年」（朝日・一〇月二三日）「ゆかりの教授・学生が出席」（東京・一〇月二三日）「心のふれ合い強めて五年」（毎日・一〇月二三日）「殺風景と緑の丘と」（日経―本立て―・一〇月二六日と、セミナー・ハウスにふさわしい見出しの報道が続いた。

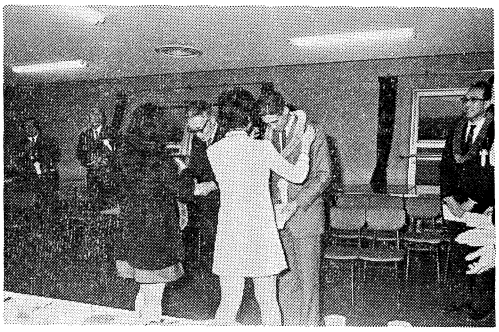
乾杯―春日井明大総長開宴の挨拶（右端）創立の思い深し、大浜信泉先生（中央）（左端は高村理事長）



お祝いを述べる永井道雄先生



増田館長から勤続五年の表彰を受ける設楽秀吉氏と三名の職員
右から飯田栄、土田美芳、荒川孝子の三氏



記念論集執筆者への感謝―学生からのレイを贈られる堀米庸三、増田四郎両先生

大学セミナー・ハウス讃歌

作詩　藤富　保男
作曲　塚谷　晃弘

Ⅰ

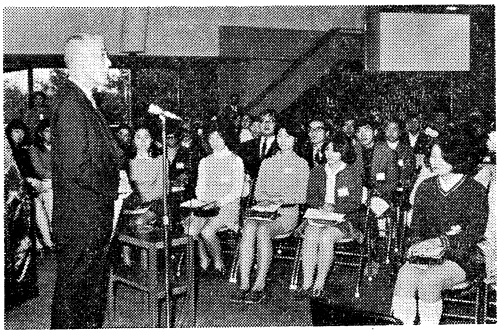
この丘を歩こう
真理の鐘は
未来への声だ
生活は簡素に
あなたもわたしも
歓びの歴史を作る
ここ　多摩の森
大学セミナー・ハウス

Ⅱ

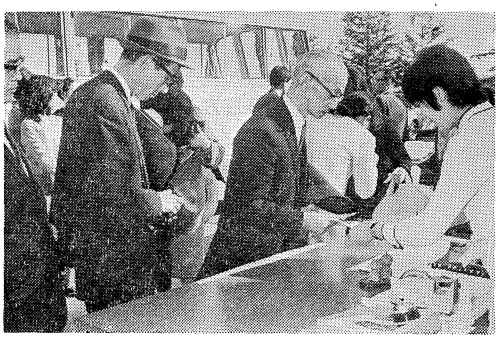
この道を歩こう
七枚の葉は
はげしい知性だ
思想は高く
ぼくときみと
風に坐って永遠を語る
ここ　多摩の丘
大学セミナー・ハウス

教える立場にある者はもちろん、こういう環境で学問を知り、感性にみがきをかける学生諸君には、ここは終生忘れられない思い出の丘になるであろう。（藤富）
右から塚谷晃弘、藤富保男両先生

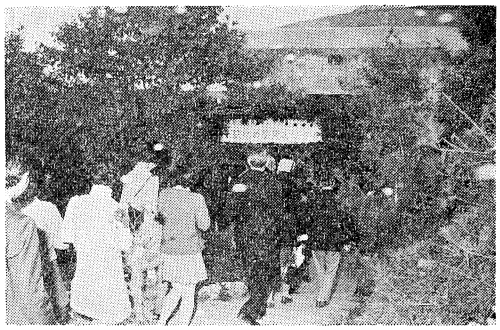
パーティー風景―加藤東大総長も加わって



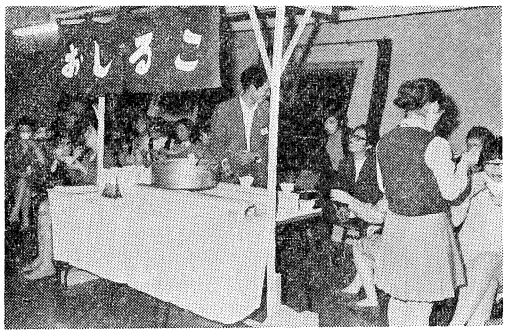
閉会の言葉とともに、感謝を述べる飯田専務理事



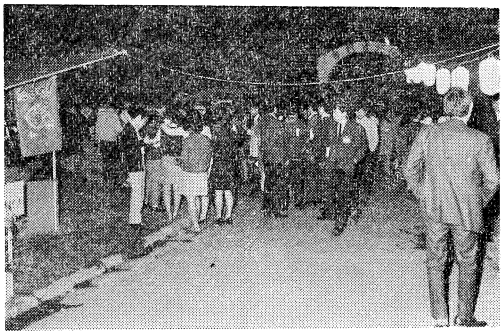
受付風景―佐原六郎先生（中央）



祝賀のアーチ
―式典会場からパーティー会場へ―



味も満点―模擬店風景



歩行者天国出現
―わた菓子、たこ焼の屋台並ぶ―

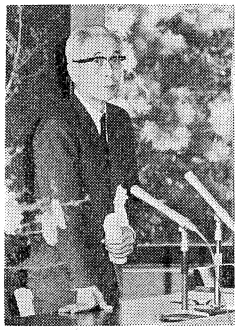
燃えよ希望の火よ―五年間の古村を焼くボン・ファイヤー

記念講演

現代の学問的状況
―医学を例にして―

前千葉大学長　川喜田愛郎

現代の学問的状況は、一言でいえば分化あるいは専門化であり、各々の学問領域で実質的な仕事をするにはある意味で専門バカでなければできないということは、疑いのない事実です。しかしそれは一つの病的な状況であり、そこから脱け出ないかぎり、学問の退廃が起るであろうことはほとんど必至のように思われます。だからこそ学問の総合ということが盛んにいわれるわけですが、とどまるところを知らない分化に対して、ただ総合というだけの掛け声に終わらないために、第一に総合は何のために必要か、第二に総合という過程の中にどのようなフォーマティブな原理、方法がなければならないかということを考えてみる必要があると思います。医学を例にとって考えてみましょう。



病気は、ヒッポクラテスの言葉ではパテーマで、Sufferingを意味しますが、病気を含めた悩みは、元来、原始宗教的・呪術的、あるいは自然哲学的に考えられていたのです。一方では経験的な見方もギリシャ以後に出てきてはいますが、やはり前科学的なものでした。

人が自然の中の客体として発見されたのは一七世紀以後のことで、ウィリアム・ハーベイの画期的な「血液循環論」から近代医学が始まったと普通にいわれています。彼は、血液は心臓というポンプで押し出され、その力で心臓に戻ってくるという非常に明晰な実証をしました。そこではじめて、人がいわば一つの機械として登場し、近代医学が決定的な方向をもつようになったのですが、今日からみれば、それは近代生物学の始りではあっても、近代医学の始りとはいえないように思います。病気を正確に知るためには、解剖学、生化学、遺伝学等々、様々の具体的な知識の体系が必要であり、医学がしっかりした学問的基盤を得るには、ハーベイから一五〇年の長い、それこそ分化が必要だったのです。このような分化の結果、それぞれの領域が自律的な運動、発展を展開するようになり、お互いに共通の言葉を持たなくなります。例えば微生物の感染によって起る病気を微生物学者と病理学者は、それぞれの専門の領域からみているだけで、現実に病気は放って置かれるという現象が起るのです。人を機械とみなしたその頃から、人の体と心が切り離され、専門化によって今日の進歩があった一面、病気が人という単一な実体をその場所とするため、その弊害をまともにかぶるという事態が生れてきたのです。

そこで何のために総合をしなければならないか、という最初の問題に戻りますと、事を成すという問題に戻ったときに、総合ということが特に要求されるのではないかと思います。医学の場合には病人を直すというカテゴリカルな命令があり、その意味では気楽であったのですが、心臓移植をとってもおわかりのように、今日医学が何をなすべきかということは、大変難しい様々な問題を含んでいます。科学の進歩が人類の幸福、進歩につながるという素朴な信念も、公害、あるいはBC兵器などの問題にぶつかると、人間は、何をなすべきかということは、とても専門バカの手におえる問題ではありません。そこで一人一人が根源にさかのぼって問題の性質を見極めること、そういう自覚をもった一人一人の人間が協力してお互いの幸福のために何をなすべきかを、広い場できたえ上げ練り上げることこそ、当面必要ではないかと思うのです。そのためにinter-disciplinaryな協力の場であるセミナー・ハウスの役割は大きいということを一言申し添えます。

（記念講演の概要　文責・編集者）

思い出と展望
祝辞より

早稲田大学元総長　大浜　信泉

私と飯田さんとの出会いは、私が昭和三〇年から私立大学連盟の会長をしていた関係上、その諸会合に顔を合わせたのがきっかけでした。昭和三四年三月六日、飯田さんが早大総長室にお訪ねになり、セミナー・ハウスの構想を話され、自分が生涯を献げてもいいのだ、というえらい熱っぽい話があったのであります。私は発想そのものに大いに共鳴を感じたのでありますが、さて実現ということになると、懐疑的な考えの方が先行したのです。その理由は第一に、国立・私立の別を越えて協力して継続的な事業をやるということが、日本の大学ではたして可能だろうか、第二に、建設には相当巨額の資金が必要だが、責任のはっきりしない大学の寄合い世帯に、業界財界が金をまとめて出すだろうかということです。飯田さんは私のほかに、茅、上代両先生にご相談になり、三四年六月に四人が集まって、今後どう進めていくかという相談をし、さらに、範囲を拡大して、慶応の佐原先生その他一〇人内外の方々にお集りいただき、都下の三〇前後の大学が会員校となって経費を分担することと、法人化することを決めるとともに、財界から寄付を募るには後援会の組織が必要であるということから、飯田さんのお骨折りで三井銀行の佐藤喜一郎氏が中心になって募金の組織ができたのであります。その後、募金の目安もつかないうちに、飯田さんはもう敷地の選定をやっておられる。寄付金は余り集まらないのに建設計画をどんどん進めて、幸い清水建設が請負代金の支払いは寄付金が集まり次第でいいから、と工事を進めてくれまして、四〇年七月五日開館式を挙げるまでにこぎつけたのですが、当時、確か未払金が数千万円残っておりました。

人間の一念とは恐ろしいもので飯田さんの熱意と粘り強さ、旺盛な実践力によって、このハウスが出来上がり、なおこの五年間に当初予想した以上の成果を上げている姿を見て、非常に感慨深いものがあります。今後も増々その機能を発揮して、大学改革の上に何らかの示唆を与えてもらえることを期待して、私の祝辞といたします。

東京大学教授　堀米　庸三

風がこの丘の上をわたり、樹々がざわめきわたるのを見て、私は聖書のヨハネ伝にある「風は意のままに吹く、人そのいづこより来たり、いづこに去るかを知らず。すべて霊あるものかくの如し」という言葉を思い出しました。

最近の世界は大変政治化しております。ある一つの言葉なりスローガンを、これでもか、これでもかとたたき込む。そうなると人間の方も同じような反応をするようになります。チクロといえば、日本人全体がチクロ、公害といえば公害という。どちらもわれわれにとって大変に大事な問題でありますが、ただオウム返しに反応することは、はたして生きた人間のすることでありましょうか。私どもは、もう少し他人と異なった土俵をもっていいのではないかと思うのです。この中に全共闘の諸君がおられるかどうか私は知りませんが、彼らと同じ土俵に立って議論したなら、諸君はおそらく負けるでしょう。私は彼らのいっておりますことは全面的な真理ではなくても、何がしかの真理をもっていると思います。彼らは何かを求め、その結果としてちょうどプラトンの比喩に出てくる、真理を発見したような人が、感激を覚えてそれを人に伝えようとするのと同じで、その状態はプラトンの言葉によるとマニア、狂気であります。そのような狂気をもって語られると、大抵の人は反応するすべを知らない。政治づいた現在の社会を回避することによっては、この社会を生きていくことはできませんし、よりよい社会にしていくこともできないだろうと思います。そこで先程のヨハネ伝の言葉にかえりますが「風は意のままに吹く」の「風」は、ラテン語で書かれたブルガータによれば spirit であります。風 spirit は一つのものである。あなた方はすべてが一つの、本当の命をもつもの、つまり自由をもつものであってほしいということを、私はこの機会にお願いしたいのです。おそらくこのことのためには、このハウスが大変に役に立つところであり、紛争をさけてここに勉強に来るということではない本当の意味の利用の仕方が、これから出てくることを期待したいと思うのであります。

朝日新聞論説委員
元当ハウス企画委員　永井　道雄

日本の私学の中心である早大が、戦後二五ヵ年間に大学の総力を上げて集めたお金の総額は三〇億円だそうであります。これは東大の一年間の経常費の八分の一です。しからば東大は非常に恵まれているかというと、文部省の大学関係予算は二、八〇〇億円ですが、ご承知のように四次防は一兆円を越すことが決まりました。つまり規模が違います。このような状況ですから小・中学校の先生の給料は、公務員のなかでも行政職より少ない、大学の方はまだしもましなのであります。しかし大学の先生も大した給料をもらっているわけではありませんから、相当休講も多いのです。（笑）ところが今お笑いになった若い方たちがどういう人であるかについて、最近世論調査がありました。この青少年白書によりますと、わが国で理想をもって公共のために働きたいという若い人はわずか一％です。あとの九九％は小さいけれど楽しい家庭、次に早く偉くなりたいというのが圧倒的であります。しかし、これは日本の過去二五ヵ年間の片肺歴史、経済は尊重するが、教育は尊重しないという大人の歴史を、若者は反映しているにすぎないと私は考えています。これが現在の日本の状況であるということをはっきりご記憶願いたい。そうしますと大学セミナー・ハウスは大変大事であります。これは飯田さんほか、何人かの方々が奇人であったからできたのです。現在の日本で立派なことをやろうとするなら、ノーマルでは駄目です。ここにお集りの若い方々も、どうか立派な奇人になっていただきたい。

このセミナー・ハウスという拠点から、一体何をつくり出していくかという問いを、今日の記念は、五周年の記念であるよりも、今後五年、一〇年の出発点であるということを、奇人である飯田さんほか、職員の方々が思っていらっしゃるに違いない、という私の推測を申し上げて、お祝いの言葉といたしたいと思います。

ご縁の深いことです

inter-university の妙味

東京大学名誉教授　山内　恭彦

セミナー・ハウスに五年間縁を持ってみて、一番感じたことは、ここが官立、私立の別を撤廃した、東京の大学の共同の会合所である特徴であった。二〇年以上にわたって、私が東大で教えた学生数は、全体として相当な数にのぼる。したがってそのおのおのの学生の顔や名前を憶えることは、無精な私にはとてもできない。面倒だから東大の学生は皆自分の学生のつもりでいた。といっても、戦後は服装によってこの学生かを区別することができなくなったので、大学生はどれも同じような気持で接することができた。電車の中で、どこの学生かわからないのに、しつけの注意を与えることもある。また、ある冬、学生が合繊製らしいスマートなオーバーを着ていたので、「君、そのオーバー暖かいか、僕も一つ買おうかしら」といったら、「あまりお年寄向きのスタイルではありませんよ」と断念を勧告されたこともある。この調子だから、セミナー・ハウスでも学生とのつき会いは始めからそう変ったことはなかった。

学生はよいのだが、先生の方はどうなるかと多少心配した。ところが、セミナー・ハウスに来てみると、始めてお目にかかった方々とも、旧知のような気持で話し合うことができて誠にうれしかった。講演もさることながら、先生方との座談の間にいろいろ教えられることが多く、大げさに言って、魂の触れ合いができる。これが私をセミナー・ハウスに引きつける大きな力である。

これからのセミナー・ハウスに望むこと

慶応大学名誉教授　佐原　六郎

昭和三四年一〇月二八日、慶大研究室で飯田さんからセミナー・ハウス設立の発起人になるように要請されたのが、ハウスと私との関係の生じた最初の機縁である。

過去一一年間の曲折ある経過を回想して感慨なきを得ない。

今夏イタリア旅行に際しシェナで三泊した時、シェナ大学は諸外国のイタリア研究の諸学者を集めて、夏期共同研究会を開いていた。イタリア語に堪能な慶大の二友人の案内で、ゆきずりの私ではあるが、各国学者の宿泊する国際会館で、セルフサービスの夕食をともにした。人文、社会、自然諸科学の学者が談笑しているのを見て念頭に浮かんだのは、セミナー・ハウスでも、日本語の自由にしゃべれる諸外国の学者を一堂に集めそれぞれの研究成果の発表と討論をしてもらうことができたら、諸外国における日本に対する関心と研究の進度がわかり、よき刺激となるだろうということであった。

人間のすることなすこと、万能というわけにはいきません。八王子のセミナー・ハウスにしても、これがすべての大学にとって有意義であるなどということにはなりえません。先生は講義さえしてくれればよい。それ以上のことを先生に期待しない。教室以外のことは先生とは無関係に自分で処理する。—このように考える大学生がいるとしても、それはそれなりに筋が通っています。ごりっぱ！　とさえいえるかもしれない。そして、この大学生にとって八王子のセミナー・ハウスの存在は何ものでもないでしょう。

ただ、セミナー・ハウスの存在がある程度の、相当の、あるいは大きな意義をもちうるような大学生もたくさんいるということは言えるでしょう。この「も」に支えられてわたしどもは八王子へ足を運んでいるにすぎません。とてもとても、八方美人というわけにはいかないのです。

祝開館５周年！

早稲田大学教授　川原　栄峰

「どういうわけか」

国学院大学教授　三枝　充悳

ことしの夏のビールの広告に、「どういうわけか」というのと、「男は黙って」というのがありました。ぼくの研究テーマのひとつは、東洋思想と西洋思想との比較です。右の二つのフレーズを眺めた時、ふと、「どういうわけか」に東洋思想を、「男は黙って」に西洋思想を連想しました。「男は黙って」は（もちろん「女はしゃべって」ではなくて）、近年やかましい「主体性」の確立に通じます。

「どういうわけか」は、大上段にふりかざした主体性はもとより、厳密な因果関係をつきつめていくことを放棄しつつ、しかもどこかに因果の連綿たるつながりを残し、その間を主体が自分の道を歩んでいます。そのような、まわりまわってオヤと思うような、ソコハカと知られないつながりこそ、そしてそのつながりにおける主体の発見こそ、ぼくが大学セミナー・ハウスにうかがうたびに学生諸君に申しあげている「縁」なのです。そしてその「縁」をはこんで行くのが「業」です。

大学セミナー・ハウスが五周年を迎えて、「縁」は四方八方にひろがり、そのはしの方でぼくもつながっています。これだけ広い「縁」をもっと、その「業」もいよいよたいへんでしょう。そして、これからも、大学セミナー・ハウスの理念と活動とが、「どういうわけか」全国の大学関係者をはじめ、いろいろな方面にいっそう深く浸透して、ますます広く「縁」をむすび、その「縁」を大切にし、「業」を果たしていってほしい、それがぼくの希望です。

芸術セミナーを！

東京大学助教授　芳賀　徹

私の知るかぎり、いまの日本の大学に最も足りないものの一つは、生きた芸術作品を享受しながらさらにその新たな創造へと学生たちをうながすような雰囲気、ないし場所である。法・経・工といった実学を中心にして発達してきた日本の大学に、そのような無用の「遊び」に類した科目を設ける余地はなかったし、文学部の授業でさえ長いことドイツ風の歴史主義や観念論美学に縛られて、現代芸術の創造の問題に勇敢に具体的にかかわってみようとすることはめったになかった。今後もなおしばらくその事情は変りそうにもない。とすれば率先して実験を試みるべきは、この面でも、われらのセミナー・ハウスだろう。詩や小説、映画や演劇、音楽や絵画など芸術の諸ジャンルについて、あるいはそれらを綜合したかたちで、セミナーを開き、日本と世界における現代芸術の活発な生命の営みに触れてみたい。

開館五周年記念
第31回大学共同セミナー

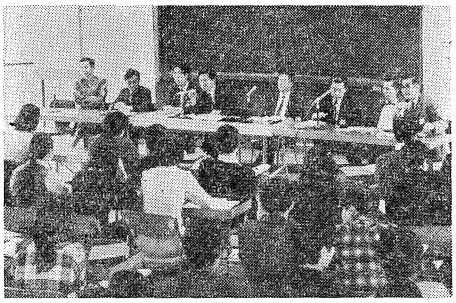
主題　学問における創造とは何か

期日　昭和45年10月22・23・24・25日

〈全体講義〉
Ⅰ創造の過程と成果
東京大学名誉教授　大塚　久雄氏
Ⅱ観と勘
武蔵大学学長　正田建次郎氏

〈セクション指導〉
Aマルクス
専修大学教授　内田　義彦氏
Bウェーバー
神奈川大学教授　内田　芳明氏
Cフロイト
聖路加国際病院医長　土居　健郎氏
Dパスカル
東京教育大学助教授　桜井徳太郎氏
Fカント
立教大学助教授　村田　全氏
Gアインシュタイン
日本大学助教授　広重　徹氏
Hダーウィン
科学史家　筑波　常治氏

〈参加学生〉
一五八名（うち女子八〇名）
津田塾大（一九）、早大（一三）、慶大（一〇）、一橋大（八）、東京女大（八）、ICU（七）、中大（七）、日本女大（七）、青山学院大（六）、外語大（四）、東洋大（四）、共立女大（四）、専修大（四）、国学院大（四）、お茶の水女大（三）、東京教育大（三）、上智大（三）、聖路加看護大（三）、慈恵医大（三）、横浜国大（二）、成蹊大（二）、武蔵大（二）、明治学院大（二）、信州大（二）、埼玉大（二）、独協大（二）、和光大（二）、東大、東工大、農工大、東京医歯大、立大、東京理科大、武蔵工大、法大、滋賀大、静岡大、千葉大、成城大、東海大、国士館大、関西学院大、東京医大、神奈川大、大東文化大、聖心女大、国立音大、各一名。


住谷一彦先生（中央）の司会によるシンポジウム

全体講義をする正田建次郎先生

△主題の主旨▽

開館五周年記念セミナーとして、このテーマを選んだのは、現代のわれわれをとりまく問題状況が、学問的「創造」の意味をあらためて考えることを要請していると思われるからである。さまざまな分野においてすぐれた創造的業績を挙げた先人たちを取り上げて、彼等がどのような懐疑と緊張と苦悩の中で学問的「創造」のいとなみを続けたのかを顧みることが、この問題を考えるうえで最もよい手がかりになるであろう。

開館五周年記念のセミナーに出席して

……三泊四日のすべての一瞬一瞬が私にとって本当に「最高の時間でした。―何の不便も不快も感じることなくこうした感激を与えられました。今までとても手の届かぬところにいらっしゃった先生方と直接話をし、そして質問に答えて下さったこの喜びは、とても言葉では言いつくせません。あれだけの内容のある、あれだけすばらしい反応のかえってくるセミナーを私は始めて経験しました。これが真の大学だ、こここそ私の求めていた学問の場だと何度思ったことでしょう。寒さも忘れ、明け方まで語り続けたあの充実感は決して忘れられない思い出です。

（津田塾大学　藤木愛子）

三つのかけ橋

館長　増田　四郎

私はセミナー・ハウスだけでなく、今日の日本の大学においては、特につぎの三つの架け橋の努力がいままでになく大切であろうと考えている。すなわち、その一つは、「断絶」といわれるムードの中での世代の架け橋であり、第二は、学問研究における理論と実際の架け橋であり、第三は、あまりにも分化した現代科学の専門と総合の架け橋である。

セミナー・ハウスは、このことと真剣に取り組む場であることが望ましい。「思想は高潔に、生活は簡素に」をモットーとする私たちは、このユニークな施設をフルに活用して生きた学問への眼を開いていただきたいと念じている。

これからの五年

企画委員長　松田　智雄

昭和三七年一一月二〇日に第一回の企画委員会が開催され、当時の東大文学部教授手塚富雄先生が委員長に選ばれました。昭和四一年四月から、私が委員長になるまでの創業期四年間は実に手塚富雄先生の指導力によったのであります。この時代にセミナー・ハウスの大切な基本的姿勢が決まったといってもよいでしょう。

現在の企画委員会は、構成人員も大部分新しくなりましたが、セミナー・ハウスの使命と目的を理解され、次々と新機軸を出しています。開館の五周年記念行事として、共同セミナーを企画したり、「記念論集」を編集いたしました。このような記念論集を発行して五周年を祝うことができるまでにセミナー・ハウスは成長したわけであります。セミナー・ハウスがいつまでも生々として存在するためには、企画委員会の任務は重要であります。五周年を祝う心は同時に次の五年への新たな第一歩であるよう祈るものであります。

開館五周年記念論集（中公新書）
『西洋と日本』―比較文明史的考察―　増田四郎編
世界史におけるヨーロッパと日本　増田四郎
ヨーロッパとは何か　堀米庸三
日本人の思惟方法　中村　元
日本文学のひとつの見方　島田謹二
『現代科学と人間』　山内恭彦編
現代科学と人間　山内恭彦
人間に未来はあるか　渡辺　格
新しい生活空間　高山英華
機械と人間　高木純一

この協力に支えられて

千人会

現在会員
五三〇人（大学人四〇一人／社会人一二九人）

第11回報告

C　武蔵大学教授　玉蟲　文一殿
C　東京大学助教授　小堀桂一郎殿
C　目黒郵便局員　太田　正孝殿
A　サンエス・クリーナー代表者　関口　実殿
C　セミナー・ハウス職員　荒川　孝子殿
C　セミナー・ハウス職員　設楽　秀吉殿
C　森永牛乳店主　太田喜美夫殿
B　東京大学教授　高野　雄一殿

（以上八名）

一、〇〇〇人の力が結集されれば千人力となりましょう。たった一つでも、日本の中に一、〇〇〇人が支える不思議な財団が存在すれば、「教育に参加する」とはどういうことかが社会もわかるのではないでしょうか。

五周年を迎えて善意の輪を広げ文字どおり一、〇〇〇人の後援会になるよう、話のわかる人をお誘い下さるよう願います。

開館五周年記念 ピアノ購入資金のお願い

「講堂にピアノがほしい」という声に励まされて、この度セミナー・ハウス讃歌の誕生を機に、そして開館五周年記念のお祝いの心をこめて、三〇万円也のピアノを購入することにしました。

どうぞ五周年記念をお祝い下さるお気持をもって金額の大小にかかわらず、募金にご協力を仰ぎたいと存じます。

―――ご寄付の現況―――

二七、三六五円　式典当日の募金箱
五、〇〇〇円　日本女子大学教授　大原恭子殿
二、〇〇〇円　八王子市長　植竹圓次殿
五、〇〇〇円　目白学園女子短大　仲野電機社長　千野熊男殿
一三、五〇〇円　東京大学教授　大塚久雄殿
五、〇〇〇円　国立大学協会名誉教授　中川　章殿
五〇、〇〇〇円　日本経済新聞社員　奥　繁光殿
四五、〇〇〇円　第三回学生指導セミナー講師グループ一同
一三、九七〇円　第三回大学共同セミナー参加学生一同
一、〇〇〇円　協力学生　新石正弘殿
八〇〇円　協力学生　生田幹男殿
一〇、〇〇〇円　日本ワークデザイン　協会殿
一〇、〇〇〇円　明治学院大学教授　岡島真理殿
五、〇〇〇円　早稲田大学　碧稲会殿
五、〇〇〇円　東京芝浦電気社員　伊藤　修殿
合計　二〇三、六三五円也

専務理事ノート

茅誠司先生が「読売」新聞に「五周年の感慨」をお書きになったが、私にとっても五周年を迎えることができたことの感慨は深い。初めは「この道や行く人なしに秋の暮」という心細さを感じたが、悲願を達成したいまは、この丘を歩いている学生諸君の姿を毎日見ることができるしあわせに大きな感謝を捧げて、あの人、この人のご支援とご協力を思い出しているのである。

誇りうることは、過去に二回の募金運動をし、そしていま第三回目の募金をしているのであるが、募金経費が極めて僅少で、いつも目標額を集めることができ、大蔵省の指定寄付金の中では最も能率がよい募金だといわれることである。茅東大総長、大浜早大総長、増田一橋大学長という大物募金係が無給で歩いてくれるわけだし、特別な募金事務局があるわけでもなく、私の副業でやっているわけだし、勿論三井銀行の佐藤喜一郎氏も善意の奉仕であるから、経費はかからないが能率はよいはずである。この奉仕が礎石である。

私はいただいた金だから、全額指定の目的に使わせてもらうことを心がけてきた。いわんや寄付金の無駄使いや不正支出があっては申訳がないので、いつも厳正にしてきたつもりである。幸い会計担当者にも人を得、今日まで間違いがなかったことは、当然のことといえば当然のことであるが、私にとっては、うれしいのである。

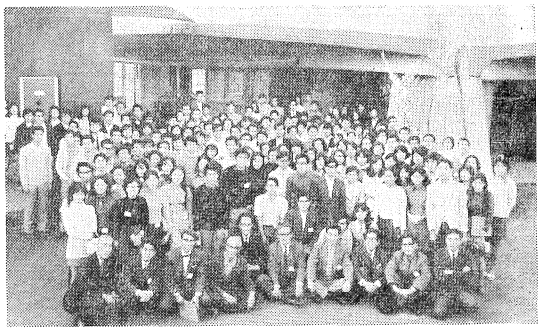
私は人生の冒険に旅立つ前に先ず自分の健康を確かめておきたかった。昭和三七年二月聖路加病院の人間ドックに入った。健康の確証を得て、まだ財団法人の組織もできていないのに、その年の四月にICUを退職し、背水の陣をしいた。もう後退は許されない。

一念発起してここに一二年、開設してここに五周年、私も心身が少しく疲労したらしい。近来片足そしていまは両足がしびれるので五周年記念行事も全て終了したところで一一月二三日から人間ドックに入ることにした。心身を休養しながら、健康度を再確認することとした。ブルドーザーも時には補修点検が必要である。

創立当初の発起人、企画委員の諸先生が、あんなにも美しい協力をして下さったのは、どういうわけだったのだろうか。思い出しては感涙を覚えるのである。東大総長室で、大隈会館で、銀行クラブで、三井銀行会議室で、大磯会議で、箱根協議会で、教育会館で、私学会館で、工業クラブで日本の大学の現状を語りながら友好的に応援して下されたのである。このような美しい協力、たくまない善意の中でセミナー・ハウスは誕生したのである。美しい心の人々と出会ったご縁に対し、私は終生感謝することを忘れないであろう。

創業の最中に働き人となってくれた四人の職員が五年勤続で表彰されたことはめでたいことである。かかげた教育理念が現実に活かされるためには、平凡な日常の業務が大切である。このような忠実な職員が日常の職務を自らの人生の中に意味づけて勤務されるならば、またとない人間性の豊かな職場となるにちがいない。

讃歌を学生と歌いながら、千人会の力強いご声援を受けながら、これからも私は一筋の道を歩みたい。今年も残り少くなりました。読者の皆様の上にご平安を祈ります。


五周年記念(第31回)セミナー参加者